
迷った先は真剣な世界だった

貧弱戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷った先は真剣な世界だった

【Nコード】

N0325X

【作者名】

貧弱戦士

【あらすじ】

とある財閥の御曹司である柊 光。彼は中学校生活最後の夏休みで、家族と所有している島にバカンスしていた。だが、バカンスしている最中でも勉強、勉強。彼は別荘を飛び出し、島の山奥へと入っていった……それが、こんな事になるとは

知らない道を通ると、何故かわくわく感が出るって俺だけ？

俺は今日まさに、最高の日であった
ホント……最高だよ

光「なあ、セバスチャン」

「なんでしようか、坊ちゃま。それに私はセバスチャンでは無くて
ただの執事ですぞ」

光「いや、目にセバスチャン的なもの付けてんじゃん？ 大丈夫、ア
ンタならなれる。俺が保障してやるよ」

「そうですか。で、用件とは？」

用件？

そんなの、見なくたってわかんたる？ 今日家族でバカンスだぜ？
俺子供、海にレッツ・ゴー！ 常識だよ

光「何で俺は家で勉強何だよ！？ 何処の家が子供にこんな事させ
てんだ！！」

ただいま別荘で勉強中の俺
さげんなよ……俺の親がざまあゝす的なのに勘違いされるだろ

「しかし、貴方は財閥を継ぐ御曹司ですぞ。将来のため、今こそ時
間が欠かせないのです」

セバスチャンは熱く燃え、目が完全に熱血に

もとい、窓から脱出して

最後にセバスチャンの『それは負け犬言葉ですよー！！？？』
という声を聞き、俺は島の中に入っていった

光「くそ〜！！！！ 親父達め〜！！」

イライラをしながらも、俺は森の奥深く入って行く

光「それにしても、何だぁここは？ 入って行くに連れ、だんだん
暗くなつていくな……」

こんな時でも、何故かワクワクしてくる
いや、こう知らない道とか歩いたりすると、かなり面白そうなんだ
よな

こつ……冒険心が？ 疼く的な

光「……………おい、誰だ」

後ろから視線を感じる

これは……かなり危険だな。猛獣か？

まあその程度であって欲しいがな
下に落ちている長い枝を慎重に取り……

『ビュン！』

出た瞬間に体を捻り、下段から振った

感触は無し……当たっていないか

こつ見えても俺、一応全国クラスだからな……て、誰に説明してるんだ？

『ビュン！』

またかよ！

次は上段に構え、渾身を混めて振った

可笑しいな、あれが当たっても可笑しくななのに、当たらないなんて
もしかして、小さいのか？

じゃあ……

暗いからよく見えない

何かは急に立ち止まり、視線をまたも俺に向けた
睨んでいるのか？ めんどくせえな……

今度は居合い構えにし、どう来るか待った
奴は急に口元が笑い、何かを取り出した

『シユン』

光「おつと！ ん？ 何だぁこれは……」

受け取ったのは、物凄く古い刀だった
古いから、全身に岩や泥やらくっ付いている
俺は別に、化石博士になりたいんじゃないがな…

光「おい、これって……もう居ないし」

奴の姿はもう跡形も無かった
一体、奴は俺に何をしてほしかったんだ？ こんなボロイ刀まで預けて

光「……空しい。帰ろ」

ここに居ても仕方ないし、帰るか
元来た道を見て、俺は歩き出した。すると、風が吹き始めた

『ビューーン！……！』

光「げ！？ なんだよ、この突風！ 嵐かよ！」

体が浮くぐらいの風が吹き始めた
可笑しいなあ、お天気お姉さんは嵐は来ませんよって言ったはずなのに……

俺はとりあえず後ろを振り向いた
目に映った光景は……

光「おいおい、何だよこれ……ファンタジー？」

暗いのに、何故かハッキリ見える光景

そう……俺の後ろには、森も無いただの真っ黒の空間だった
まさにブラックホール

俺を吸い込もうとしている

光「俺まだ、ファイナルファンタジーやっていないのに……！！！！！！」

そのまま宙に浮き、真っ黒の空間へと入った

……最後に言いたい。親父……お袋……リア充死ね

光「うっ……ここどこやねん」

何故か関西弁だったが、起き上がるとそこは……

「おいキャップ！そこはパスだろ！？」

「いいんだよ！サッカーも冒険しなくちゃ！」

「大和……カッコいい」

「お姉さまー！！さっきプレーはカッコ良かったわ！」

「ふむ、さすが私だ！オーバーキックは最高だったぞ」

「いや、完全に炎を纏っていたよ！？つか、ガクト！？ガクトは無事なの！？」

「チーーン」

「……ガクト……！！！！！！！！！！」

なんともまあ、愉快的な男女組だった

知らない道を通ると、何故かわくわく感が出るって俺だけ？（後書き）

感想をください！

考えている内に行動を起こす……アリですか？

光「……………よし、これは夢だ。何故に急にバカンス途中から何処かの原っぱに居るんだ？ テレポート？ いやいや、俺は超能力者じゃねえよ。正常だ……じゃあ、これはやつぱは夢だな」

うん、今決めた

夢！ 夢しかありえない

寝よう！ 寝れば全て解決だ

寝る体制を取り、俺は深く眠りについた……
起きれば森の中、森の中なんだ

「おいこら、川神いいいいい！！！！！」

「此間のお礼に来てやったぜ」

「覚悟しやがれ」

……………これは、もしや悪魔の囁きか！？

なんで夢の中に、不良言葉を言う奴が居るんだ
信じろ、俺！ これは夢だと！

????「何だあ、お前らまた来たのか？ 暇な奴らめ」

????「はは……懲りないね」

これどう聞いても、喧嘩の勃発前だよな？

何、神様はこれを止めると？ 無理無理無理無理！！！！?????

俺はどこぞのヒーローじゃあねえんだ！ 今のは聞かない事に…

耳を塞ぎ、目を完全に閉ざした

「死ねやあああああ！！！！！！！」

光「無理だって言ってるんだろうが————！！！！！！！！！！」

『ド————ン！』

体が勝手に動き、バットを持った奴を容赦無く蹴ってしまった……

……悪魔の囁きが！？

やべえよ、皆口をあんどぐりあけているよ

光「……………まあ、君達の友達は不運だな。まさか謎の少年……………仮に太郎君としよう。まさか蹴りを入れられ、まさかの瞬間逃走……………どこぞの超人なんだろうか。酷い！ 何て酷いんだ！ じゃあ、俺は今警察に……………「待てやごら」」

「完全にテメエだよな！？ 何だよ太郎君って！？ 意味わかんねえよ！ 理解もできねえよ！」

光「意味わかるう。理解もしよう」

胸倉掴むなよ、タコが

視線をバットに向け、この後の展開を待った

「ふっざけんなあ！！」

殴られる瞬間、左手でバットを掴み瞬時に後ろに回った

「????」「ほう……」

「な!?! 奴は……」「ここだよ!?!」

光「我流………ケツバット!?!?!?!?!」

『バコ!』

「うぐつ!?! け、ケツが………!」

さすが一本打法だ

威力は半端ないな……

ケツバットした奴はケツを抑えて、気絶した

光「……ま、これも何かの縁だ。この後の展開は、俺が貰ってやるよ」

バットを正面に向け、決め台詞を言う

ふふ、カッケエよ俺

これが片付いたら、たぶん現実に戻れるだろう
神様も何気に酷いなおい

「まこっちゃんか!?!? この野郎!?!?!?!?!」

「ぶつ殺す! 死ね!」

光「我流………連続ケツバット!?!?!」

『ドン！ バン！ ガン！』

光「はあはあ……………つ、疲れた」

????「へえ、やるじゃねえかあのモヤシ野郎」

????「うん、ガクト以上だね」

俺の後ろには築き上げた城……

もとい、人の山が出来上がっていた

不良も中々やるな

大の字になり、俺はそこで気を失った
これで、やっと夢が終わった
さらば大変な夢

「……ん、どうするんだ？ 気を失っているし……」

「……面白そうな奴だな！ あの必殺技もカッコ良かったし！」

「……ただのケツバツトなのにね……」

「……うん、ねえお姉さま。この人、川神院に連れて帰らない？ ほっとけないし」

「……そうだな……私も考えた事だ。見かけない顔だしな。よし、今日はここまでだ！ 私はコイツを連れて帰るからな」

うーん、目が眩しいな…閉じているのに
そうか、もう夢が終わったのか…

光「……………今度は何処やねん!!??」

またも関西弁でツッコミ入れたのが不覚だった
今度は家の中かよ…

考えいる内に行動を起こす……アリですか？（後書き）

感想をください！

最強？ マジでか……

光「……屋敷か？ しかしデケエ」

まずは敵情視察だ

此処は何処？ を、今のテーマにして探索する

まずは此処の人に会って、電話を貸してもらわなくては……

たく……これもあれもそれも、全部親父達のせいだ

光「すんませーいん！！ 誰かいないんスカー！！！！」

『シ〜〜ン』

空しいわ

誰も返事してくれないし、まさかの声が響かない

こんだけデカイのに

光「……はあく。とりあえず、もうちょい遠くまで行くか」

ため息をはき、未知なる廊下を使ってさらに遠くまで行った

光「へえ、結構古い建物だな」

周りは傷や古い板

歴史ある建物か？ 名家じゃねーかな

気になる点を見つめ、脚を歩かせる

『ドーン！！！！』

光「うおおお！！！？ ポ、ポルターガイストですか！？」

「うう……」

いきなり横の壁が砕かれ、人が吹っ飛んできた

なんつゝ霊が此処に住んでいるんだ……こんな強そうな坊さんを吹っ飛ばすとは

気になりだし、とりあえず壁の向こうをチラッと見た

爆発のような煙の中に、何人かの坊さんが転んでいた

光「ん……？」

それよりも気になったのは、その中には坊さんとは違う俺ぐらいの身長の子が居た

女の子で、髪が短い

それより気になるのがもう一点だ

何で堂々と立っているんだ？

普通なら、脚がすくんで立っていられないか、坊さんみたいに吹っ飛ばされるのに……

て、解説している場合じゃねえ！

光「き、君！そこに居たら、幽霊さんが怒っちゃうよ！被害が来る前に、早くコツチに非難して！」

危険地帯から安全地帯に誘導する

俺の言葉が届き、女の子はコツチに振り向いた

「????」

光「?!?!」

目が合った

その瞬間、俺からの水分が一気に出了気分だった

なんだよ、あの狂気！？怖すぎる……

まるで、猛獣に食われる瞬間みたいだった

目がもとから赤かったのか知らないが、まるで紫に近い色だった

全ての筋肉が全身を周り、俺の防衛本能が開花した

けど……そんなことでは、此処からは逃げ切れない

否、『逃げ』何て言葉はここには存在しない

いままで全国クラスを自慢にしてきたが、関係無くなった
俺が最弱の全国クラスなら、あの女の子は最強の全国クラスだ
次元の違いと言ってもいい……どうすればいいか？ どんなことを
やればいいのか？

「がはっ！」

「はぁ……………うっ」

……………そうだ

俺はこんな考えしている間は逃げているんだ
逃げちゃ駄目だ。逃げちゃ終わりだ。逃げちゃこの人たちを助けら
れない

ほんの小さな正義感が、一気に大きな存在となった
些細な事でもいい！ 考えろ、俺！

『なら、ワシを使ってみろ』

その言葉が、俺の脳に聞こえた
使っつて、何だよ急に。何処の中二臭い奴だよ

俺は近くにある木刀を取り出し、女の子に向かって突っ込んだ

光「ハアアアアア！！！！」

『ドン！』

当たった！！

『バキ!』

光「げ!? マジかよ……」

当たったと思ったら、手で防がれてそのまま木刀を折られてしまった

女だからと思って甘くは見ていなかったが……ヤバスだな
本気すぎるぞ、この雰囲気

何か、何か細い物は……!

手当たりしだい落ちているものを探る
すると、手が吸い寄せられるようにある物を掴んだ

『使え』

またも声が聞こえたが、とりあえず後回しだ!

だが、俺が掴んだ物はあの時の泥が付いたのだった

何でここに……つか、こんなんじゃあ使えない

『ワシはまだピッチピチじゃ!! 今時の刀と一緒にするな!』

……何、この意味不明な声

声は女の人の声だが、この場では俺とあの女の子しか居ないしな
ついに、俺も終わったか?

『クッ……! まあよい。ワシの力をお主に分けてやる。ありがたく
思うのじゃ』

じゃあいますぐ何とかしろやあ!! なんか、女の子がさらに怖く
なったからよお!

人生の末路も見えてきたし!?
駄目元で、声の主に頼んだ

『我……時の時空を超え……えと、何だっけなあ復活の呪文はのう』

おいしいiiiiiiii!!! 覚えとけよそんぐらい!

つか、何でメモとかに書かないんだよ!? ドラク の復活の呪文
みたいにさあ!

『ええと……と、とりあえず解放じゃ!!!』

とりあえずは入れんな! つか、それじゃあ前置きはイラネエよ!?
するとあの泥の棒が赤く光だし、泥が次々と取れていく
こ、この刀は……!?

??? 「!?!? 何だ、それは……」

光「こ、これは古墳時代の刀『直刀』。特徴は日本刀と違い、完全
な直線の刃。妙に長い棒かと思ったら、そういう事か……」

刃は真っ赤な血の色であり、他以外は真っ黒
しかし初めてみた、まさかまだこんな新しいのがあったとはな

光「まあいい。ちょっとズルしているみたいだけど、対等にやれる」

??? 「お前が私と? クク……ハハハハハハ! お前みたいな、
弱そうな奴が私と対等……いいだろう! 私を満足させてみる!」

光「上から見せていうんじゃないやねえコノヤロー。とりあえず、あん

たを倒す！」

「????」「倒す……それだけ言われれば、私も……」

光「俺は……」

「「真剣^{マツ}／本気^{マツ}で行くぞ！」」

その言葉を共に、一気に俺達は距離を詰めた

最強？ マジでか……（後書き）

感想をください！

俺はやれば出来る子だ！ 近所のおばちゃんと言っていた！

光「うおおおおおおお！……！！！！！！」

????「はああああああああああああ！！！！！！」

大声を上げ、俺は全力疾走している
直刀を片手に目をずっと開きながら

光「いやああああ！！！！？？ 来るな——！！！！！！！！！！」

????「逃がすか、腰抜け！」

絶賛、逃走中……

いやもう超恥ずかしいですけど、何か本気で怖いんですよ
きつと、あの子には悪霊が憑いていると俺は思っている

あそこまで馬鹿力で、光る何かを放っているし……

光「何て、俺もただ逃げているわけじゃねえ！！ 柊 光！ いざ
参る！！」

左足で急ブレーキし、その反動で一気に詰める
直刀を抜き、目元に構える

『右から来るぞ』

右？

そんな言葉を耳に貸し……

「????」「食らえ!」

『ビュン!』

光「げげっ!? うわっ!」

奴の左脚が俺の右頬を掠った

ほ、本当に右からきやがった……なんだよ、この直刀は
だが、それは後で解決してらやあ!

今度は俺からの攻撃ターンだ! 食らえ!

光「メーーーーーン!!!!!!」

『ズン!』

「???」「くっ! 何て力だ……!」

一本は取れた

が……片手で防いでいやがる

刃では無い方でやったが、まるでやられた後がねえ

これも悪霊の仕業か

『小童……まあよい。次は当身から下段攻撃じゃ。それぐらい出来るじゃろ』

俺を誰だと思っていやがる……!

光「俺は出来る子だぞ……!!!!!!」

「????「何っ!?!」

そのまま当身をし、女の子がよろけている今がチャンス!
下段を構い、またも俺が詰める

光「ハアアアアアア!?!」

『ビュン!』

「????「チツ!」

女の子は一瞬で立ち直り、俺が振った瞬間に後ろに下がった
だが刃が服に当たり、肩が斬れている
やっべえ、本気でやっ^{マシ}ちやう所だったよ……
うっん、しかしどうするか……

『小童……何躊躇っている? 早く斬れ』

斬れっってお前……

「????「面白い! 今度は私からだ!?!」

光「目が怖いですよ、貴女!?!」

『ドン! ガン! ズン!』

ふ、防ぐのは不得意何だよなあたく

『小童、何を思っているんだ』

何って、こんな女の子を斬るわけにはいけねえしょ？

この子は悪くないし、全ては悪霊のせいなんだからな……なあ、何とかならねえか？

俺のおかげで、お前が目覚めた的な？

『……ふむ、ここでお前が倒されるとワシの目が疑わしくなるしう。仕方ない、特別じゃぞ』

ああ、ありがとう

で、どうすればいいんだ？ こんな乱撃のコイツを止めるにはそろそろ手が痺れてきている

『じゃあ………選手交代じゃ』

へ………？

すると、俺の何かが移動し始める。命みたいな、大きいのが直刀も赤く光、それが俺の体全体に伝わっていく

それにつれ、俺の中から出た青いのが直刀に伝わる

ま、まさか……！？

まさかと思ったのが遅かった

俺の意識は、もう………

直刀であつた

????「ふう〜、久々じゃのう！ この外の空気は!!」

『ゴキ！ ゴキンー!』

爺のような口調で、肩や指や首を鳴らしている
完全に俺のキャラじゃねえ……

「……のう」

「『?!?!?!?!?!』」

な、何だよコイツ……

あの女の子より、半端ねえよ

いや比べる程じえねえ。ぶっちぎりだ

奴は直刀俺を持ち、右手に鞘も構えている

「……お、おい！ 刀身が、赤から青に変わっているぞ！！ ト、トリックか!?!」

それはたぶん、俺とコイツのせいです……

何だよコイツは!?! 急に俺の目の前に現れてから、ろくな事はねえ!

もしか、ここに来たのもコイツのせいか！ じゃあ、完全に夢じゃあ……

「……」見ておけ、小娘。

喜劇きげき

『カチヤ』

……え、今何が

俺が気づかぬうちに、もう女の子は倒れていた
それに、女の子の後ろに立っている俺達

???「じゃあ、また交代じゃ」

超いい笑顔ッスね

俺達は何も無かったように、
またも入れ替わった
いや、戻った

???「何事じゃ!」

???「!?!? お、お姉さま!?!」

……コイツ、まさかこの展開を読んで!!

俺はやれば出来る子だ！ 近所のおばちゃんが言っていた！（後書き）

感想をください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0325x/>

迷った先は真剣な世界だった

2011年10月11日13時00分発行